

韓国における音声研究の方法論と展望*

－アクセントを中心に－

高 慧禎（東国大学校）

キーワード：韓国、実験音韻論、音声科学、実験音声学、アクセント

1 はじめに

韓国において実験音声学的研究が行われるようになったのはつい最近であり、実験音声学を含めて音声学という学問の位置付けが明白ではないが、一方では、自然科学的側面から実験科学として捉える音声科学に位置づけられているのではないかとも思われる。これについて M. R. Kim (2002: 5) は、以下のように記している（和訳は、筆者による）。

1977 年には大韓音声学会が結成されて韓国語音声学の研究に対する国内の基盤となったが、1980 年代以降、海外留学を終え、帰国した学者らの研究成果とかみ合い、ようやく韓国語の音声学が位置づけられるようになった。一方、理工系の学者によって 1982 年に設立された韓国音響学会は、音声の認識と合成が産業的技術に広範囲に応用できる可能性を土台にしたものとして、今後の音声学の発展に寄与することを予告するものである。

…（中略）…1990 年代以降の韓国語音声学の動向は、コンピュータを用いた実験音声学にその主流を見出すことができる。

*本稿は 2005 年度に筑波大学に提出した博士（言語学）請求論文の一部を改めてまとめたものである。本稿をまとめるに当たり、査読者の方から貴重なコメントをいただいた。この場を借りて感謝の意を申し上げたい。

一方、日本における音声学は、かつて服部 (1951, 1984) をはじめ、城生 (2005) にも主張されているように、人文科学としての学問に位置づけられており、いわゆる自然科学としての音響工学や音声情報処理などは明瞭に一線を画している。城生 (2005: 17) は、実験音声学と音声科学との違いについて、

実験音声学と音声科学は似ていて非なるものである。歴史的には、前者が Jean-Pierre Rousselot によって 1889 年にフランスで創始されたのに対し、後者はその 43 年後の 1932 年に Ginneken (ヒネケン) らによってオランダで創始されている。目的は、前者が調音音声学を典型とする主観的研究方法に対する客観的裏づけをはじめとして、音韻論、言語変化を核とする通時言語学、記述言語学、方言学、言語地理学など言語音にかかわる諸分野と密接な関わりを持った自然言語音に限定した学問領域を措定する、経験科学としての音声学の一分野を形成するのに対し、後者は主として自然科学的方法を援用して、人類一般に備わっている音声現象を実験科学的方法によって捕捉することを目的としている。

と述べており、両者は研究目的が異なるという点に注目する。

以上から、日本における音声学は、人文科学としての学問に位置づけられているが、韓国における音声学は自然科学の方に寄りかかっているのではないかと推察される。

2 本稿の目的

上述した M. R. Kim (2002) から分かるように、韓国における音声学の歴史は浅く、この学問の位置づけもはっきりしていない。また、韓国語ソウル方言は音韻論的にアクセントを持たないため、アクセントに関する研究はあまりなされてこなかった。しかしながら、アクセントに関する先行研究が全くないとはいえない。そこで、本稿は、従来の韓国語ソウル方言のアクセントに関する研究史について概観したうえで、そこから韓国における音声研究の動向を検討し、今後の展望を示すことを目的とする。

3 先行研究

3.1 音声学

私見の及ぶ範囲では、韓国における実験音声学の泰斗は、千葉 (1935) の影響を多分に受けていると思われる I. S. Jung (1965) にまで遡ることが出来る。

日本における実験音声学の母胎となる千葉 (*ibid.*) は、オシログラフ (ocillograph) を用いて韓国語のアクセントの特徴を観察する試論を発表している。また、I. S. Jung (*ibid.*) は、文中に繰り返し現れる単語のアクセントを用い、ソナグラフ (sonagraph) によってイントネーションのレベルに依拠した分析を行っている。これ以前に、李克魯 (1947) のように、実験音声学の開祖 Rousselot (1897-1908) が用いた間接法と同様の人工口蓋法とカイモグラフ (kymograph) を用いて、韓国語の単音に関する音声観察を行ったという例もある。その中では、韓国語のアクセントに関する特徴も言及されており、波形分析を背後に控えた実証的研究姿勢が垣間見られる。

以上の研究では、フランスの Rousselot が活躍した時代に使われていた初期の機械を用いていた点に注目しておきたい。しかしながらこれらの研究は、韓国国内で行われた実験結果に関する報告ではなく、海外の所々で行った実験結果を韓国で発表したものに過ぎない。この点から考えると、韓国における初期の実験音声学的研究は、日本やヨーロッパからの影響を受けていたものと推察される。その当時の韓国では、器械を用いた実験音声学的研究は見当たらない。

1950年代以降の韓国では、Polivanov (1938) と Martin (1951) によるプラーグ学派の影響を強く受け、ようやく古典的な音韻論的研究が行われはじめていた。これには、U. Heo (1955)、S. N. Lee (1960) などがある。

韓国語のアクセントについて、前者の研究ではアンケート形式の聴取テストからその特徴を捉えており、後者の研究では、内省判断に基づく伝統的な研究方法による観察を行っている。専ら主観的および聴覚的記述に頼らざるを得なかった伝統的な調音音声学的方法を採択している。また、この当時の研究においては、音韻論と音声学との境界線が明確ではなかったことが窺い知れる。このような状態は、1980年代まで続いていた。

H. B. Lee (1973) は、韓国語においてアクセントが置かれる位置を判断するための方法として、最初にリズム (rhythm) 上の韻律単位であるマルトマク (marthomak)¹という概念を導入し、リズムのパターンを手がかりとし、ソウル方言のアクセントにおける理想化された姿を論じた。これに則り、聴覚印象によって伝統的な調音音声学的観点からのアクセント分析をした結果、音節構造と音節数という両面から韓国語のアクセントに迫り、単音節語を除く2音節以上の単語においては、母音の長短と音節構造によってアクセントが置かれる位置が予測できることを主張した。ただし、マルトマクという韻律的単位に寄りかかった分析は、それ自身音韻論的考察であり、したがって本稿の分類としてはここに入れるべきかどうか微妙なところである。

1980年代後半以降、ようやく韓国において、主観的方法²による従来の先行研究に対し、客観的手法による音響実験から裏付けようとする試みが窺えるようになった。代表的研究は、H. Y. Lee (1987, 1990)、C. J. Seong (1992) などがある。

H. Y. Lee (1987, 1990) は、H. B. Lee (*ibid.*) の見解を最初に実験音声学的観点から検証した研究である。基本周波数の観察に優れているといわれる *visi-pitch* を用いた音響分析を行ない、さらに聴取実験によって韓国語におけるアクセントの特徴を音節構造³から捉えた。厳密に言えば、この研究は音節量という音韻論的側面からアクセント規則を論じているところから、実験音韻論に近いものであり、純粹な実験音声学的研究とは言い難い。

¹ここでいうマルトマクは H. B. Lee (*ibid.*) の術語である。単語 (2音節語、或はそれ以上) より大きい単位で現れるソウル方言の一般的なリズムの韻律単位である。Pike (1945) のいう *syllable-timed rhythm* でもなければ、*stress-timed rhythm* でもなく、しいて分類するとすれば後者に近いと彼は言っている。

²服部 (1984: 8) では、音声学的研究方法に、いわゆる「主観的」あるいは「聴覚的」方法と「客観的」あるいは「実験的」方法の二つがあるとされている。前者の場合は、耳での観察や外から相手 (自分の場合は鏡に映して) の音声器官の働きを目で観察することなどもこの方法に含まれている。後者は、人工口蓋・カイモグラフ・レントゲン写真・オシログラフなどの器械により、瞬間的な発音運動や音声を何らかの固定的な形に記録して練密に観察研究したりする方法である。両者の違いは器械を用いるか否かにある。本稿で用いる「主観的」・「客観的」という術語は服部 (*ibid.*) に従う。

³音節を音節量によって重音節 (*heavy syllable*) と軽音節 (*light syllable*) に分けている。前者は長母音か子音で終わる音節をいい、後者は短母音で終わる音節を指している (H. Y. Lee 1997: 47)。

また、C. J. Seong (1992) は、上で述べた H. Y. Lee が音響解析に用いた *visi-pitch* を批判し、*masscomp 5500* という音声分析ソフトを用いて音響的特徴を捉えた。この際は、キャリアセンテンス⁴に挿入した短母音のみを対象とし、音節量と音節数という2大パラメータを先験的にはとっておき、この仮説からトップダウンによる演繹的な方法によって現象を解釈しようとしている。

従って、1980年代以降の研究は仮説検証型の方法論を常とする音韻理論、またはその延長線上にある実験音韻論に近いものがその大半を占めている。

また、韓国における音声学的研究は、かつては主観的研究方法による伝統的な調音音声学・聴覚音声学がその主流であったが、1990年代になって自然科学⁵に依拠した客観的方法による音響音声学的研究などが行われるようになったのである。

従来の韓国語における音声学的研究は、主に調音音声学・音響音声学的研究が大半を占めているが、認知と関わる聴覚生理音声学的研究は、高 (2001, 2003, 2005a, 2005b) が挙げられる程度である。よって、話し手が調音した言葉が聞き手に伝わって、その言葉が理解されるまでの様々な言語現象を、脳神経科学を援用した脳波実験から解明していくことにより、従来の音声学的研究方法におけるバランスの偏りが解消されることが期待される。これに関連した指摘がある。服部 (1975: 9) では、

… アクセントのそういう音韻的な、すなわち「言語的」、ラング的な見方と、客観的音声実態との相関関係を、機械を用いての実験で確かめ、可能な限りその結果を我々の耳の生得的・生理的聴力（「言語的」な聴取習慣に非ず）を用いて確認することができれば、我々の研究をいっそう科学的とすることができる。また、どういう客観的事実があるかということを確認しただけでは不十分で、それをわれわれの耳が

⁴*jogie—manitta* / (ここに__だけある。) といった文の枠組み (sentence frame) の中に無意味語を挿入して発話してもらう方法である。

⁵今西 (1984) は、自然科学とは区別される「自然学」を提唱した。今西は、現象から答えを出すことばかり急ぐより、自然という神秘で大きな世界の原理をつかまえることが大事だという。細分化が進んでいく現代の科学では、自然の本質は結局つかめないものだから、全体自然を改めて見つめ直す必要があると主張した。この主張は、本研究における実験音声学の立場とも通じる部分がある。詳細は、城生 (2005) を参照。

いかに把握するのかということをはっきりと明らかにして初めて、現象の科学的解明に成功するのである。言語音声ばかりでなく、文法その他を含む言語現象一般の研究方法を自然科学のそれに近づけようとの努力が近時著しく、それ自体は大変結構なことと思うが、言語および音声は、人間の心理的・生理的活動に基づく現象で、複雑極まりないものであるから、人間を疎外したり、分析方法が単純に過ぎたりすると、失敗する。“科学的”になろうと急ぎすぎると、かえって非科学的となるのである。音声学を科学として成長させるためには、やはり自然科学におけるような客観的研究方法を出来るだけ発達させることが望ましい。

「主観的方法」をできるだけ「客観的方法」によって置きかえるよう努力することが望ましい。この故に、「実験音声学的」研究方法の発達に大きい期待がかけられるのである。

と述べられており、音声に対する客観的事実を確認する実験の必要性が強調されている。さらに、最後は人間の耳で判断されること（すなわち、換言すれば聴覚情報処理による認知レベル）により、その実態が科学的に解明されるということを指摘している。

3.2 音韻論

一方、韓国における音韻論的アクセント研究は、示差的特徴を持つ諸方言に偏向している。服部 (1961) のアクセント素観によって、示差的機能を持たない方言や言語に関しても、音韻論的解釈の道が開かれたのだが、それにもかかわらず、示差的機能を持たないソウル方言に関するアクセント研究は、示差的機能を持つ方言のアクセント研究に比べて多少遅れている傾向にあるということである。福井 (2001) は、韓国語ソウル方言に関するアクセントの特徴を以下のように述べている。

表1の中で「無アクセント」としたものはソウル方言などがその典型である。こうした方言では、一つ一つのアクセント句の境界が必ずしも明瞭ではなく、二つ以上の句が連なって平板に発音されることがある。ただし、これは常に起きることではなく、特に文中でのフォーカスの置き方によって、特定の句が、例えば末尾を高くして、謂わば取

り立てられるように発音されることも決して少なくはない。しかし、そのようなことがない場合には、複数のアクセント句を平板に発音することができる、というのがこうした方言の特徴である。

ここでは、韓国語のソウル方言は無アクセント方言であることを指摘しており、この方言のアクセントの特徴を句レベル⁶から捉えていることを窺い知ることができる。

以下の表1に示すように、福井 (2001: 16) は韓国語諸方言のアクセント体系を共時的な観点から分類している。まず、ピッチが示差的特徴を持つ方言としては、慶尚道方言および咸鏡道方言、全羅道方言の一部を挙げている。一方、ピッチが示差的特徴を持たない方言には平安道方言、全羅道方言一部、ソウル方言を挙げている。

表1: 韓国語アクセント体系の分類⁷

示差的	多型アクセント	慶尚道型 (釜山、大邱など)
		咸鏡道型 (中国東北部も含む)
	N型アクセント	慶尚道型 (慶尚道西部、全羅道光陽市)
		全羅道型 (一部)
非示差的	一型アクセント	末尾高 (平安道など)
		第2音節高 (全羅南道の一部)
	無アクセント	ソウルなど

3.3 アクセントかイントネーションか

3.1でも述べたように、韓国語のアクセントを捉えた主観的手法による音声研究は、Polivanov (1938) を筆頭に、小倉 (1940)、S. N. Lee (1960)、H. B. Lee (1973)、河野 (1979) などと続く。このうち、プラーグ学派の一員である Polivanov (1938: 80) は、以下のように韓国語のアクセントを記述している (括弧内の和訳および【 】の補注は、筆者による)。

⁶Martin (1951) は韓国語のアクセントの特徴をイントネーション体系に属するピッチの構成要素とみなしている。

⁷福井 (2001: 16) から一部改変して引用した。N型アクセントという術語は上野 (1984) に基づいている。また、これは早田 (1999) の「語声調」にあたるものとされている。

‘Und schließlich hat im Koreanischen ein Wort innerhalb des Satzes Endbetonung, doch im Satzschluß sowie in isolierter Aussprache Anfangsbetonung.’

(韓国語では、文中における単語は末尾音節にアクセント【stress=強勢、以下同様】を持つが、文中ではなく独立した単語として発音されると、語頭音節にアクセントを持つ。)

以上の指摘は、音声学的レベルから韓国語のアクセントを捉えた最初期の研究として知られている。ただし、今日的レベルから見直すと、アクセントとイントネーションとが截然と分けられていない点に難がある。

また、河野 (1979) でも、アクセントとイントネーションとの混同が見られる。河野 (*ibid.*) は、韓国語のアクセントは単語の第1音節に置かれるとしている。ただし、単語レベルでのアクセントよりも、文レベルでのイントネーションによる卓立が主であると指摘している点に特徴がある。

一方、S. N. Lee (1960) は、聴覚印象と内省判断に基づき、韓国語のアクセントについての考察を行っている。特に、プラーグ学派の影響を受けた S. N. Lee は、韓国内で最初に韓国語に強弱アクセントがあるという説を提唱しており、この主張が現在にいたるまで韓国語のアクセント研究に甚大な影響を与えている。

次に、器機を用いた客観的手法による研究には、私見の及ぶ範囲で、千葉 (1935)、I. S. Jung (1965)、野間 (2001)、長渡 (2003)、宇都木 (2004) などが挙げられる。これら一連の研究はピッチパターンに注目している。

まず、野間 (2001) と長渡 (2003) は韓国語のピッチパターンが頭子音の種類によって決められるという。しかし、両者におけるピッチパターンを記述する際の方法論が全く異なる点に注目したい。つまり、野間 (*ibid.*) は単独発話による言葉の観察であるのに対し、長渡 (*ibid.*) はキャリアセンテンスに挿入した言葉の観察によるピッチパターンの記述である。それにもかかわらず、長渡 (*ibid.*) は、野間 (*ibid.*) の2音節語のピッチパターンに対する記述とその傾向が異なると批判している。一方、宇都木 (2004) は、単独発話による言葉のピッチパターンは文レベルにおけるイントネーションの一種であると指摘している。

以上の点からみると、韓国語のプロソディー研究は、その大半が句レベルまたは文レベルから捉え、語レベルの研究は不足していると思われる。

4 実験音声学と実験音韻論

3.1でも触れたように、私見の及ぶ範囲では、韓国における実験音声学的研究は1990年代以降から頻繁に行われている。これは、実験器材の技術的発達と音韻理論の進展に起因する。

例えば、H. Y. Lee (1987)、C. J. Seong (1992) などの研究は、韓国における実験研究の母胎となっている。これらの研究は、音響実験および聴取実験を通して韓国語のアクセントに関する特徴を考察してはいるものの、最終的には、音韻論の観点からアクセント規則を立てている。

また、S. A. Jun (1993) は、生成音韻論の *intonational phonology* の枠組みから音響実験を行い、韓国語ソウル方言におけるプロソディーの構造を捉えている。S. J. Rhee (1987) も基本的には S. A. Jun と同様、生成音韻論の韻律理論 (*metrical theory*) の枠組みから、韓国語のアクセント規則を立てている。

上述した S. A. Jun (*ibid.*) は、海外で活躍している学者であり、Ohala (1976)、Beckman & Pierrehumbert (1986) などの実験音韻論 (*laboratory phonology*) 的研究に強い影響を受けているように思われる。また、S. A. Jun は音声学的事象を理論の枠組みの中に入れて、その理論を実験で検証し、更なる理論を展開させていく仮説検証型の研究立場をとっている。

具体的には、韓国語の韻律構造を下位から、音節 (*syllable*) → 音韻的単語 (*phonological word*) → アクセント句 (*accentual phrase*) → イントネーション句 (*intonational phrase*) → 発話 (*utterance*) の順に設定した。この際の韻律単位の設定については、アクセント句の音声学的実現においてどのような特徴を持っているかに関心を示している。

また、3.1でも述べたように、H. Y. Lee (1990) の研究でも、音節量という音韻論的観点から、音響実験および聴取実験を通して韓国語のアクセントの特徴を捉えているが、この研究も従来の伝統的な実験音声学的研究に属するものとは言い難い。

以上のように、1990年代に入ってから韓国における従来の先行研究は、純粋な実験音声学的研究よりも、主観的方法による聴取実験と客観的方法による音響実験を行い、そこで得られた結果から規則を立て、理論化しようとする実験音韻論的研究が多い。

これまで行われてきた韓国語のアクセントに関する実験音声学的研究は、トップダウンによる演繹的方法 (deduction) に基づく実験科学的研究といえる。つまり、韓国で行われている音声研究の大半は、理論・仮説、実験、検証といった仮説検証型の実験研究のプロセスによるものである。このプロセスを図式化して図2に示す(筆者による)。このプロセスは、実験音韻論の研究手法と同様であることを指摘しておく。



図2: 従来の韓国における実験音声学的研究方法 (筆者による図)

このような状況から、音声研究、ひいては言語研究において、バランスの取れた理想的な研究姿勢が求められる。城生 (2005) は、音声学と音韻理論との関係を以下の図3のように示し、この流れに沿って研究が実現されると、理想的な研究態勢になると指摘している。図3に関する内容を城生 (*ibid.*: 25) から引用する。

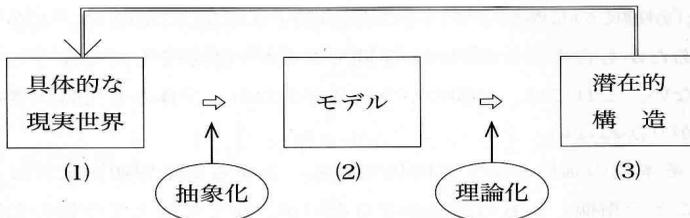


図3: 音声学と音韻理論城生 (2005: 24) より転載

(1) ボトムアップによる観察と再現性の確認を科学的に行い、(2) この結果を尊重した上で抽象化を行い、トップダウンによってしかるべきモデルを立て、これを操作することによって潜在的な構造を浮き彫りにする理論化を行い、(3) そのようにして構築された理論の妥当性を、再び (1) に還元して検証しなければならないことを示している。

城生 (*ibid.*) では、(3) の段階による研究、すなわち理論の妥当性を、再びボトムアップした現象の観察結果に照らして、その再現性を確認するというプロセスが、従来の言語学や調音音声学ではほとんどなされていない点を力説している。韓国における音声研究においても同様なことが言えるが、(2) における研究を目指すものが多く、(1) と (3) における研究が比較的少ないと考えられる。

そこで、今後は、これまでに行われてきたのとはやや異なる研究姿勢が必要となる。それは、データをとってその事実を観察・探索していくというボトムアップによる帰納的方法 (*induction*) から出発した、事象探索型の研究姿勢である。このような研究姿勢をとった実験を進めていくことで、音声研究の発展に寄与貢献できると思われる。この方法は、城生 (*ibid.*) にも指摘されているように、客観的な方法を用いて音声学に新たなる境地を切り開いた Rousselot (1897-1908)、Grammont (1933) にも見られる、伝統的な「実験音声学」の枠組みでもある

5 今後の展望

従来の、韓国における音声研究の特徴は、以下のようにまとめられる。

- (1) 演繹的方法による仮説検証型の実験音韻論的研究が多数を占めている。
- (2) 韓国語ソウル方言における韻律の特徴はアクセントに焦点を当てているのではなく、韻律構造と関わるイントネーションに目を向けているのが現状である。

そこで、今後の音声課題としては、アクセントに焦点を当てて、Rousselot (1897-1908) に見られる伝統的な実験音声学的観点から検討していくこと

が必要である。このことによって、まだ十分に明かされていない韓国語のアクセントに関して新たな提案を示すことができると思う。

【参考文献】

- Beckman, M. E. and Pierrehumbert, J. B. (1986) 'Intonational structure in Japanese and English.' *Phonology Yearbook* 3: 255-309.
- 千葉勉 (1935) *Research into the nature & scope of accent in the light of experimental phonetics* (実験音聲學上より見たるアクセントの研究) 富山房.
- Grammont, M. (1933) *Traité de phonétique*. Delagrave.
- 福井玲 (2001) 「韓国語のアクセント」『音声研究』5: 11-17. 日本音声学会.
- 服部四郎 (1951) 『音聲學』岩波書店.
- (1961) 「アクセント素・音節構造、喉音音素」『音声の研究』9: 1-31. 日本音声学会.
- (1975) 「言語音声の耳による観察と機械による実験」『音声言語医学』 Vol. 16. No. 1: 7-15. 日本音声言語医学会.
- (1984) 『音声学—カセットテープ、同テキスト付—』岩波書店.
- 早田輝洋 (1999) 『音調のタイポロジー』大修館書店.
- Heo, U. (허웅) (1955) 「傍点研究」『東方学志』2: 41-171. Seoul: 延禧大学校. 東方学研究所.
- 今西錦司 (1984) 『自然学の提唱』講談社学術文庫.
- Jung, I. S. (정인섭) (1965) 「우리말 악센트는 고저악센트 다」『中央大学校論文集』10:1-50. Seoul: 中央大学校. (わが国の言葉のアクセントは高低アクセントである).
- 城生佰太郎 (2005) 『日本音声学研究—実験音声学方法論考—』勉誠出版.
- Jun, Sun-Ah (1993) *The phonetics and phonology of Korean prosody*. Ph.D. dissertation. Ohio State University.
- Kim, M. R. (김무림) (2002) 「음성학・음운론의 연구현황 과 과제」『21 세기 국어학의 현황과 과제』3-25. 서울: 한국문화사. (「音声

学・音韻論の研究現況と課題」『21世紀国語学の現況と課題』ソウル:韓国文化社).

河野六郎 (1979) 「朝鮮方言学試攷」『河野六郎著作集』1: 101-373. 平凡社.

高慧禎 (2001) 『日・韓両言語におけるアクセント対照研究—韓国語のアクセントを中心とした ERP を用いた脳波実験—』筑波大学大学院修士論文.

—— (2003) 「韓日両言語母語話者におけるアクセント知覚—音声学的アクセントの違いによる脳波実験を通して—」『日本学報』54: 19-32. 韓国日本学会.

—— (2005a) 「脳波実験による韓国語と日本語のアクセント」『日本語学研究』12: 7-23. 韓国日本語学会.

—— (2005b) 『韓国語のアクセントに関する実験音声学的研究』筑波大学大学院博士請求論文.

李克魯 (1947) 『実験図解朝鮮語音声学』Seoul: 雅文閣.

Lee, S. N. (이승녕) (1960) 「現代서울말의 Accent 의 考察—특히 condition phonétique 와 accent 의 關係를 主로 하여—」『国語学論攷』179-227. 東洋出版社. (「現代ソウル方言におけるアクセントの考察—特に condition phonétique と accent の關係を主として—」).

Lee, H. B. (이현복) (1973) 「現代韓国語의 Accent」『文理大学報』19 / 28: 113-128. 서울대학교. (「現代韓国語のアクセント」『文理大学報』ソウル大学).

Lee, H. Y. (이호영) (1987) 현대 한국어의 악센트에 관한 연구. 서울대 언어학과 석사논문. (現代韓国語のアクセントに関する研究. ソウル大学 言語学科 修士論文).

—— (1990) *The structure of Korean prosody*. Seoul: 翰信文化社.

—— (1997) 『国語韻律論』韓国研究叢書 第65輯. 韓国研究院.

Martin, S. E. (1951) Korean phonemics. *Word* 20: 519-533.

長渡陽一 (2003) 「朝鮮語ソウル方言の音節頭子音と名詞の音調形」『音声研究』7 (2): 114-128. 日本音声学会.

野間秀樹 (2001) 한국어 모어화자의 일본어 피치악센트 교육을 위하여. 梅田博之教授 古稀記念論叢 刊行委員會 (編) 韓日語文學論

- 叢」651-675. Seoul: 태학사. (「韓国語母語話者の日本語ピッチアクセント教育のために」).
- Ohala, J. J. (1976) 'A model of speech aerodynamics.' *Report of the Phonology Laboratory (Berkeley)* 1: 93-107.
- Pike, K. L. (1945) *The intonation of American English*. Ann Arbor: University of Michigan Press.
- Polivanov, E. D. (1938) Zur Frage der Betonungsfunktionen *Travaux Cercle Linguistique de Prague VI*. 75-81.
- Rhee, S. J. (이상직) (1987) 「한국어 액센트에 대한 재검토—운율 음운론을 중심으로—」 『말소리』 11-14. 133-148. 대한음성학회. (「韓国語のアクセントに対する再検討—韻律音韻論を中心に—」 『マルソリ』 大韓音声学会).
- Rousselot, J. P. (1897-1908) *Principes de phonétique expérimentale*. Paris: H. Welter.
- Seong, C. J. (성철재) (1992) 「표준한국어 악센트의 실험 음성학적연구」 『말소리』 21-24. 43-89. 대한음성학회. (「標準韓国語のアクセントの実験音声学的研究」 『マルソリ』 大韓音声学会).
- 宇都木昭 (2004) 「朝鮮語ソウル方言における引用形のピッチパターン」 朝鮮語研究会 (編) 『朝鮮語研究 2』 7-45. くろしお出版.
- 上野善道 (1984) 「N型アクセントの一般特性について」 『現代方言学の課題』 平山輝男博士古稀記念会 (編) 第2巻記述的研究篇. 167-209. 明治書院.

The Methodology and Prospects of Phonetic Study in Korea

Hye-jung KO

The aim of this paper is to show how the problems we have to solve in the future, examining the trends in phonetic study in Korea. The features of phonetic study in Korea are summarized as follows;

- (1) Most of the studies are deductive hypothesis-testing typed laboratory phonological studies.
- (2) When prosodic features in Seoul Korean are examined, accent has not been focused on but intonation that relates to prosodic structure has been emphasized.

We need an examination based on a traditional experimental phonetics done by Rousselot (1897-1908), focusing on accent that has not been considered well from phonological point of view. By this examination, we can suggest a new proposal for Korean accent which is not solved sufficiently.

*Department of Japanese Language and Literature
Dongguk University
26, 3-ga, Pil-dong, Chung-gu, Seoul100-715, Korea
E-mail: nunbusida86@yahoo.co.jp*